

北大クリニカルシミュレーションセンターは、医学生らがトレーニング機器や模擬患者を用いて臨床を疑似体験する教育施設として2016年4月開設された。専任教員を配置し、体系的な指導に力を入れたい。

センター長1人と副センター長2人は、医学研究科教授が兼務。そのほかに専任教員（主任）の倉島庸准教授

医学生ら模擬体験する施設

授消化器外科（出身）と事務職員1人を配置している。北大病院北側の医系多職種連携教育研究棟（旧看護師宿舎）2・3階に整備。延べ約700㎡のスペース

専任教員の配置で指導強化

これまで医局や病院内の部単位でそれぞれ有していたトレーニング機器を、可能な限りセンターに集約。硬膜外麻酔や眼底診察、直腸診といったシミュレーター、点滴・採血トレーナー、トレーニング用の腹腔鏡セット、

これまで医局や病院内の部単位でそれぞれ有していたトレーニング機器を、可能な限りセンターに集約。硬膜外麻酔や眼底診察、直腸診といったシミュレーター、点滴・採血トレーナー、トレーニング用の腹腔鏡セット、

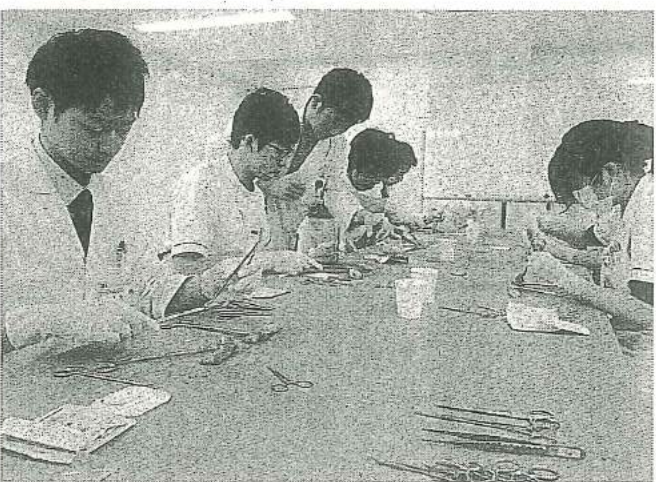
観的臨床能力試験）に活用。それぞれマジッククッキーが設置されており、医学生は教員の視線を気にせず、実技実習や試験に集中できる。教員は模擬患者に「ちょっと怒ってみよう」とイヤホンを通じてマイクで指示を

出し、臨機応変に演技を交えることも可能になった。医学生のコミュニケーション能力を高める充実した模擬面接を展開する。

これまで医学生を中心に活用されているが、医学部保健学科、歯学部、薬学部の学生に加え、北大病院の研修医、新人看護師の利活用も期待される。また、北大の教職員が参画している外部の学会、研究会、セミナーに限り、開催会場として提供する方針で、土口を含めて対応していく。

教室探訪

北大クリニカルシミュレーションセンター



充実したセンターで医学生が実習

倉島庸准教授は、留学先のマギル大（カナダ）でシミュレーターを活用した外科医のトレーニングプログラムの構築手法を習得してきた。効果的なトレーニングに加え、トレーニング中の様子をビデオ録画し、教育効果を検証することも検討するなど、シミュレーション教育を取り入れた医学教育を追究していく。



開設から1年経ったセンターは、医学生のOSCEや臨床実習を中心に活用している。これまでは医学部の空いている部屋や医局などに医学生を分散させて実施していたが、センターのワンフロアで行えるようになった。

倉島庸准教授インタビュー

加型臨床実習の推進が求められている。患者への医行為の前段階で、シミュレーションによる練習と評価は欠かせない。採血や皮膚縫合などをシミュレーションで行い、センスのある医学生から先に医行為に取り組み、そうでない医学生には、より集中的に指導していく。

インストラクター育成が目標

シミュレーション教育は医学、航空、軍事の領域で広がり、医学においては海外が活発。わが国でも内科や救急のシミュレーターは普及しているものの、指導者不足や体系的なトレーニングプログラムが未整備のため、せつかく購入しても有効活用されないケースが散見される。そうした中で、大学を中心に徐々にセンター整備が進んでいる状況だ。

海外のセンターをみると、スタッフはディレクター（医師）とインストラクター（看護師や救急隊員など）、エンジニア、事務職員で構成されている。医学生に指導するのは、インストラクターが主流であるため、北大でもインストラクターを育成したいと考えている。

指導医の指示と監督の下、基本的な知識、思考、技能、態度を学ぶ診療参